

ほそぼわだん

Lactuca lanceolata Makino
(=*Crepidiastrum lanceolatum Nakai*)

本州西部から四国・九州、更に遠く台湾に互って海岸岩場に生ずる多年生の草本。太く木化した茎は根茎状に永存し頂から多数の葉を産生する。これには花が咲かない。別に細くしなやかな側枝が茎の上部から横に出て、その頂が立ち上り且つ分枝して花をつける。座生した葉は長柄様に基脚の細まった倒披針状卵形で、全縁、草質で多少厚味があり、鮮緑色、屢々淡紫赤がある。花は晩夏から秋に入って咲くが、この茎は高さ20-30cm、その上の葉は長卵形で柄が短かく最上部では深く茎を抱く。頭花は黄色、枝端に10個内外ずつ繖房状に集まり、径1.5cm、平開して美しい。葉がポロギクに似た羽状に深裂するものをソテツナ (var. *pinnatiloba Mak.*) という。



第 3240 図

りゅうぜつさい (龍舌菜)

Lactuca dracoglossa Makino
(=*L. indica L. var. dracoglossa Kitam.*)

高さ2mに達する大形の1年生草。茎は直生、径2cm内外、クリーム色の乳液に富み中央に白髓がある。葉は斜めに開出して直接茎につき、披針形で下部は漸尖し、基部で楔脚となる。25-40cm長、上方には漸次尖る。霜白を帯びた淡緑色、軟かく、中脈は背面に鋭く隆起して屢々紫になる。側脈は多数平行して走る。秋に入り大きな円錐花叢を頂生し、黄色の頭花を密につけ、その長さ60cmに及ぶ。葉は13mm長、基部は卵形に膨らむ。瘦果は4mm長、短喙あり。葉を鶏の餌用に栽培する。アキノノゲシに近縁、恐らく支那原産か。



第 3241 図

やくしわだん

Lactuca denticulato-platyphylla Mak.
(=*Crepidiastrixeris denticulato-platyphylla Kitam.*)

海岸に進出したヤクシソウがワダンとの間に作った天然雑種であって、三浦伊豆両半島に生ずるが、産地及び交雑の組合せによって種々程度の差あり。多く不稔性ワダンに著るしかった木質の太い根茎、全縁で滑大な葉、花序が側枝に限定される等の形質が不確実となる。ワダンに近い九州のホソバワダン及び駿河湾のアゼトウナと対しても、ヤクシソウに依る雑種(夫々ヤクシソウバワダン及びヤクシアゼトウナ)を生じ、ヤクシソウ群とワダン群とはその親和性において外観の形態程には相違がないことをよく示す。



へらなれん

Lactuca linguaefolia Makino
(=*Crepidiastrum linguaefolium Nakai*)

小笠原島特産の亜灌木で、海岸岩場に生ずる。高さ1m許り、疎に分枝の茎は太く、径2-3cm、葉痕が多数残り粗雑である。葉は茎頂に密生して、水平に開出し、先端の円い広線状披針形で基脚は稍狭くなる。長さ15cm巾1.5cm内外、表面鮮緑色平坦、裏は粉白、全縁だが軽微のうねりがある。11月頃にこの密集した葉間から多数の側枝を出して、直立且つ葉を高く抽いた花序となる。その高さ10-15cm、小形の葉若干をつけ、白花を開く。頭花は径1.5cm総苞片は5枚。小笠原には更に大形の葉のエズリハワダン (*L. ameristophylla Mak. et Nemoto*) をも産する。和名は篋状の葉のナレンで、ナレンは磯馴染であろうという説がある。

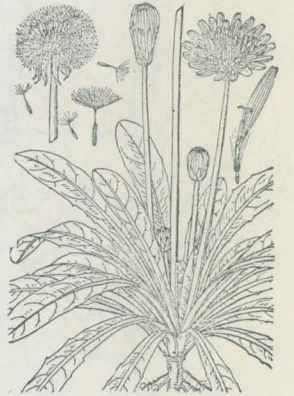


第 3243 図

かんさいたんぽぽ

Taraxacum japonicum Koidz.

関西から四国九州に互って分布する多年生草本で、草地、路傍に多い。関東地方のタンポポに比べて総苞の内外片の長さが著るしい不連続、外片は短少、内片は長さ14mm内外でその2倍半、ともに角状突起がある。葉は欠刻の有無は種々の変異があるが(図は無欠刻のもの)、欠刻の場合には頭大羽裂の傾向が殆んどない。又屢々バイオリン状のえぐれを生じる。頭花は盛開時に径2.5cm位で、中部山地から北海道に生ずるエゾタンポポ *T. hondoense Nakai* の豊大(径5cmに近く小花多数)なものには及ばない。瘦果は長楕円形、淡黄褐色で7-9溝、鱗状の刺が密生する。タンポポ類は現在種の分化過程にあるもの様で、多くの細分された種があるがなお今後の検討を要する。



第 3244 図

せんだいはぐま

Pertya Koribana Mak. et Nemoto
(=*Macroclinidium Koribanum Nakai*)

東北地方の南部に稀産する多年生草本で、高さ50cm内外、同地方特産のオヤリハグマと全国的に分布するカンワバハグマとが交雑して生じたもの。葉は茎の中央に集まる傾向あり、形はその中間を示し、倒卵状広楕円形乃至広楕円形基脚は屢々半ば有翼の形式をとって柄に流れる。葉質はオヤリに似て膜質的で裏は光沢があるもの多し。盛夏に茎頂に小さい頭花を生じ、秋に入って分枝が開出して円錐状となり頭花が開く。頭花の総苞は乾膜質で順次内部が大きくなる苞片より成り、長さ17mm内外の狭長楕円体、小花は5深裂した白色花冠を持ち1-3個、瘦果は有毛で冠毛は白い。和名は最初の産地仙台に因む。

